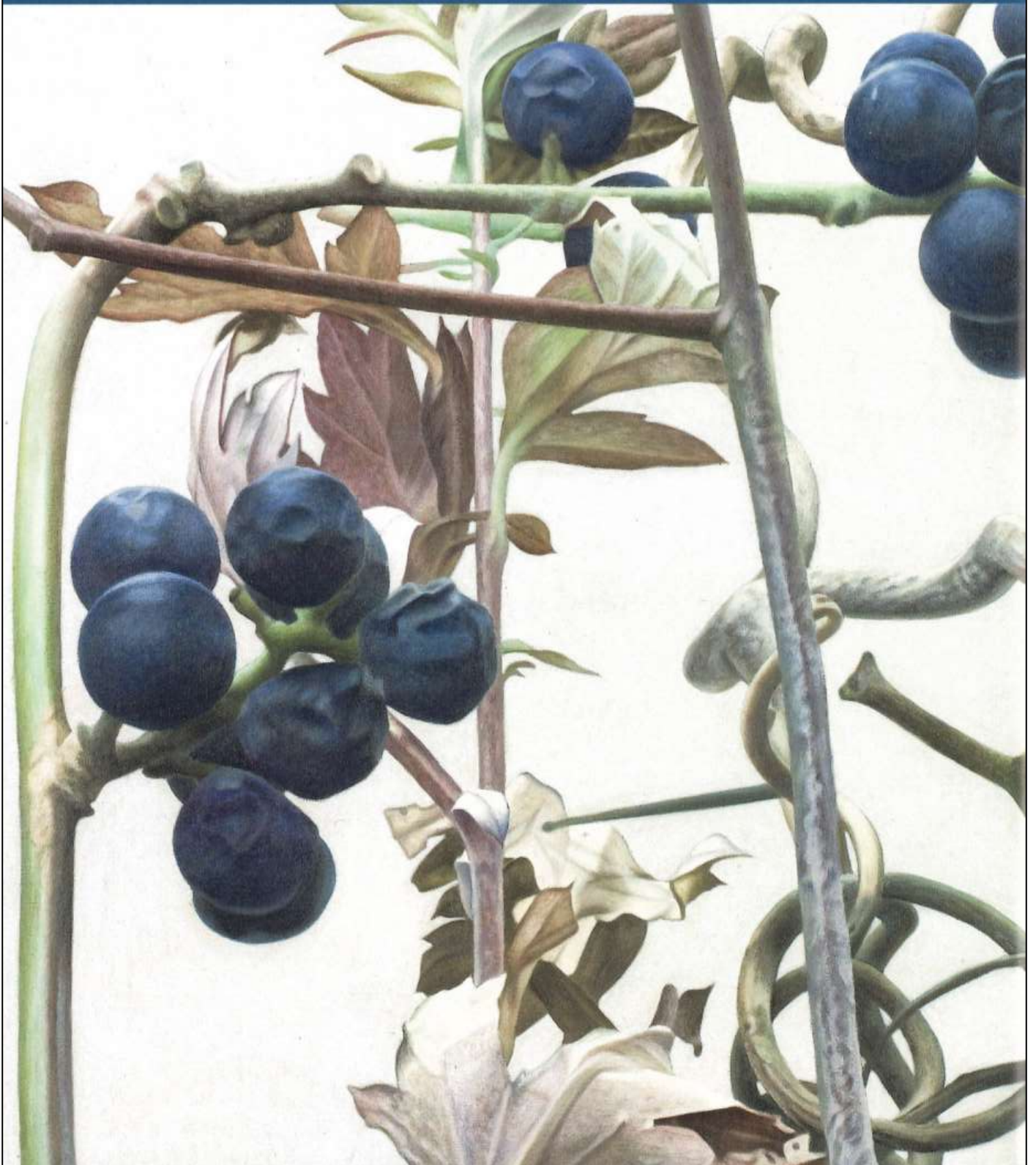


ニューリーダー 12

平成元年2月6日第三種郵便物認可 令和元年12月1日発行 毎月1回1日発行 第32巻第12号通巻386号

NEW LEADER

2019 December



シリーズ 地域活性化に挑む

一過性では終わらせない



ジャーナリスト 新谷 敬

衰退を逆手に取ったアクションプロジェクト 福岡県筑豊地区の「街おこしは爆発だ！」

迷惑施設のイメージすらある
爆発・爆破シーンの撮影を誘致

地域おこしには緻密な構想を立て地道に実行していく「構築型」と、勢いに任せて突っ走る「突破型」がある。優秀はつけ難いが、はた目で見ている面白なのは「突破型」だ。今回取り上げる地域おこしは、典型的な「突破型」だ。何しろ地域おこしのテーマは「爆発」なのだから。

舞台は福岡県の筑豊地区。炭鉱地帯として日本の近代化を支えた。「筑豊」の名は旧国名である筑前（福岡県西部）と豊前（福岡県東部から大分県北部）の頭文字から取られた。中でも福岡県田川市、飯塚

市、直方市は「筑豊三都」と称される拠点都市だ。田川地区では一九〇〇年に「三井田川鉱業所」が設立され、全国から炭鉱労働者が集まる。筑豊最大の炭鉱街として賑わい、四三年に旧後藤寺町と旧伊田町が合併して田川市が誕生した。

戦後の経済復興で石炭が売れに売れ、五〇年代に同市は人口一〇万人都市の仲間入りをする。だが、六〇年代に入るとエネルギーの主役は石炭から石油へ転換。六四年には地域の基幹事業所だった三井田川鉱業所が閉山した。新会社の新田川炭鉱が事業を引き継いでもの、急速なエネルギーシフトで六九年には閉山。地元に残ってい

た小炭鉱も次々と姿を消し、七〇年代初めに全炭鉱が廃業した。現在の田川市の人口は約四万七

六〇〇人とピーク時の半分以下に。行政も手をこまねいていたわけではない。炭鉱跡地を工業団地に再開発して企業誘致を進め、九二年には田川市内にあった福岡県社会保育短期大学を福岡県立大学に改組して若者人口の定着を図ってきた。かつて「炭鉱の街」だったことから、観光施設の田川市石炭・歴史博物館も開設。二〇一一年には同館が収蔵している炭坑労働者・山本作兵衛の絵画、日記、雑記帳などが、ユネスコ記憶遺産（世界の記憶）に登録されている。しかし、いずれも旧炭鉱地帯の地

域おこしとしてはありきたりで、それほど注目は集めなかった。

ところが今年に入ると突然、同地区での地域おこしが全国で話題になる。仕掛け人は「筑豊三都」の一つ飯塚市出身の映像作家、永芳健太だ。なんと「爆発」で地域おこしをするという、とっぴなアイデアだった。アクション映画やドラマ、特撮などで欠かせない派手な爆発・爆破シーンの撮影を誘致しようとする試みだ。

今や映画やテレビのロケ地誘致は地域おこしの「定番」だ。ロケ誘致部署を立ち上げて制作会社に売り込みをかける自治体も珍しくない。実写ではなくアニメの舞台となっただけで、ファンからは「聖地」と呼ばれて観光客が押し寄せる。活性化を目指す自治体にとっては垂涎的だ。が、永芳が



永芳健太氏

考案したのは爆発シーンのロケ地。むしろ「迷惑施設」のイメージすらある。

実際、制作会社は爆発や爆破シーンのロケ地に苦勞している。行政の規制も強化され、許可されにくい状況になっている。だからこそ「誘致すれば乗ってくる制作会社が多いのではないか」と永芳は考えた。今さら引く手あまたのドラマロケ地の誘致を始めたところで、ライバルが多い上に東京から遠く離れた筑豊で撮影をするメリットも少ない。だが、爆発シーンであれば撮影できる場所が少なく、積極的に誘致している地域はない。永芳が爆発による地域おこしを思いついたのは、小学生時代にアクション刑事ドラマ「西部警察」の爆破シーンやカーアクションのロケを見学したのがきっかけ。監督やカメラマン、スタントマンたちの真剣な撮影現場の雰囲気を感じ、自宅にあった8ミリフィルムカメラで自主映画の制作を始める。永芳は地元で撮影を進めるうちに、「筑豊にはこれだけ広い空き地や、

車がほとんど走っていない旧炭鉱道路がある。ここで西部警察のようなアクションドラマのロケをやればいいのに」と思ったという。

アクションドラマのロケ地に拒絶反応、すべての場所が断る

その後、永芳は念願かなって映像作家の道へ。仕事で自治体の地域ムービーなどの制作にかかわり、地域おこしにも興味を持った。「自分の故郷である筑豊でも映像による地域おこしができないか」と考えた時に頭に浮かんだのが、子供時代に思いついた「アクションドラマのロケ地」だった。永芳は一六年頃から複数の地元自治体に企画書を持ち込み、「爆発による地域おこし」の協力を求めた。ところが最初の反応は冷たかった。「爆発」や「爆破」と聞いただけで拒絶反応が起こり、提案したすべての場所で協力を拒否された。事故の可能性はもろろんのこと、安全であっても「暴力」や「テロ」が連想され、筑豊のイメージが悪くなることを懸念したので。

それでも永芳は諦めなかった。地道な働きかけを続けた結果、二年ほどたったころ永芳の話に耳を傾けてくれる人たちが出てきた。最初は田川市の企業だった。一八年秋に「うちの土地を使っても良い」との許可を得る。その企業は地元で美術館やレストランなどを営業しているが、集客に悩んでいた。「なんとか地元を盛り上げたい」との思いが強く、「一緒にやろう」と永芳の提案に乗った。そして同社所有地で最初の爆破イベントを開いた。

今年一月には「爆発」や「爆破」による地域おこしを手がける「筑豊アクションプロジェクト」を立ち上げた。プロジェクトの活動趣旨からは、永芳の地元にかける熱い思いが伝わってくる。「筑豊の炭坑の跡地や、手をつけられていない荒地、廃墟、シャッターが閉まったままの商店街の店舗などを、これからもただ残っているだけの場所にするのではなく、映画産業資源や観光資源に変え、「筑豊でしかできないロケの誘致」

「筑豊でしか不可能なイベント」を行えば、地元への収入や観光客の増加などにつながる」と、映画やテレビドラマの「聖地化」による地域おこしを提言している。

そして、「爆発」や「爆破」といった刺激的なテーマを取り上げた理由についても、「筑豊に付きまとう『怖い』『暗い』といったネガティブイメージも、無理にふたをせず逆手にとれば、アクションやハードボイルドといった男気のある世界観とリンクさせ、筑豊のイメージを違ったものに転換できる」と説明する。「爆発」や「爆破」はむしろ筑豊のイメージを向上させる可能性が高いことを指摘した。

さらには永芳の「危機感」も伺える。「筑豊には新しいアトラクション施設やスタジオを作るようなプランはなく、観光客が楽しめるような施設も乏しい。それならば、筑豊八市町村全域に点在する本物の乗り物や施設、道路、空き地を借り、地域自体をリアルなアミューズメントパーク化する

る」というアイデアに挑戦してみたい。

この地域おこしは突如として始まった「突破型」だが、起爆剤となった永芳の頭の中では綿密な構想が組み立てられていた。

「爆発」や「爆破」をテーマにしたロケ誘致や聖地づくりもユニークだが、永芳の地域おこしで特筆すべきは一般観光客に本物の爆発シーンを体験してもらおうイベントだ。プロジェクト立ち上げ直後の今年一月、「道の駅いとだ」（田川郡糸田町）に隣接する空き地を会場に、アマチュアレーサーが運転する車両に同乗して映画やドラマさながらのカーアクションと爆発や炎を体験できる「爆破インスタ」を実施した。似たようなアクションを提供するテーマパークもあるが、「爆破インスタ」は本物の火薬を使う。すさまじい破裂音や振動とともに一〇分近い火柱が上がり、その間近を体験者に乗せたクルマが疾走する。もうもうと上がる白煙と砂ほこりを突き抜けた時の爽快感は、「爆発も

どき」のテーマパークアトラクションとは比べものにならない。

「見る」にとどまる限界
「体験」が重要な要素

こうした「体験」も、地域おこしを成功させるために重要な要素だ。今や観光による地域おこしをやっていない自治体はないが、多くは「見る」にとどまる。よほど珍しいものならともかく、どこにもあるような「見る」観光資源では、もはや人を集めることはできない。そこで注目されているのが「体験」型の地域おこしだ。とはいえ「体験」型も自転車やカーという野外的スポーツや農業、手工芸など同じテーマの地域おこしが乱立し、先行して有名になった地域以外では集客が厳しくなりつつある。

「ここでなければ体験できない」新たな資源を発見することが重要になってきた。永芳の「爆破インスタ」は見事にはまった。遠く離れた東京からも参加者が集まり、大手メディアもこぞ取り上げ

る。

二月には池のおく園（田川市）で銃撃戦の撮影体験ができるイベントを開いた。実際のドラマなどで使われる小道具のモデルガンによる銃撃やロケットランチャーの発射を体験し、参加者がスマートフォンやカメラで撮影を楽しんだ。年初のうちは永芳に理解を示した会社の所有地での開催だったが、四月には平成筑豊鉄道の協力を得て金田駅（福岡県福智町）で銃撃戦や列車爆破などの「平成筑豊鉄道アクション撮影体験」イベントを開いた。一月にはイオン穂波ショッピングセンター（飯塚市）の屋上駐車場で「アクション撮影体験」を開催している。不特定多数の乗降客や買い物客でにぎわう公共施設がイベントを受け入れたということが、安全性に問題がないことが地元で広く認知されている証拠だ。

と撮影シーンは限られるが、駅やショッピングセンター、病院、体育館といった公共施設での撮影が可能になればロケ地としての魅力は高まる。筑豊アクションプロジェクトでは、すでにドラマやミュージックビデオ、コマーシャルなどのロケ誘致に成功しているという。米国では人口が減少して寂れた街に、ハリウッドのアクション映画ロケを誘致する活動が盛んだ。しかし、国土の狭い日本では誘致できる地域は限られる。先行している筑豊地区が有利だ。

時代劇撮影の本場として知られる太秦（京都市）のように、筑豊がアクションドラマ撮影の街として有名になれば、地域の知名度やブランドの向上につながるのとは異なる。永芳は「将来は海外からのロケ誘致や、インパウンド観光客をターゲットにしたイベントツアーも企画したい」と意欲を燃やす。筑豊アクションプロジェクトの地域おこしは始まったばかり。まだまだ「爆発」を続けそうだ。

（敬称略）
■